

目次

はしがき……………一

凡例……………三

解説……………一

一 芭蕉の俳諧の発足……………一

二 俳諧の文章としての紀行へ……………四

三 芭蕉俳文の到達点『おくのほそ道』の構成・表現……………一〇

四 『おくのほそ道』俳文の軽み……………二〇

五 『おくのほそ道』の原本……………三三

おくのほそ道

一 武蔵の部……………二九

1 深川―芭蕉庵から採茶庵へ（月日は百代の過客にして）……………二九

二 下野の部

2 千住（弥生も末の七日）……………三三

3 草加（今年元禄二とせにや）……………三七

1 室の八島（室の八島に詣す）……………四一

2 日光山の麓―佛五左衛門（此の日、日光山の麓に泊まる）……………四三

3 日光山（卯月朔日、御山に詣拝す）……………四四

（二十余町山を登って滝有り）……………四六

4 那須の黒羽へ（那須の黒羽といふ所に知る人あれば）……………五一

5 黒羽・那須八幡宮（黒羽の館代）……………五四

6 光明寺（修験光明寺と云ふ有り）……………五七

7 雲巖寺（当国雲巖寺のおくに）……………五九

8 殺生石（是れより殺生石に行く）……………六一

9 蘆野（又清水ながるゝの柳は）……………六四

三 陸奥（磐城・岩代）の部……………六六

1 白河の関（心許なき日数重なるまゝに）……………六六

2 須賀川（とかくして越え行くまゝに）……………六九

（此の宿の傍に）……………七二

3	浅香・忍の里(等窮が宅を出でて五里斗り)	七
4	丸山(月の輪のわたしを越えて)	七
5	飯坂温泉・伊達の大木戸(其の夜飯塚にとまる)	七
四 陸奥(陸前)の部(1)		八
1	笠島(燈摺・白石の城を過ぎ)	八
2	武隈の松(武隈の松にこそ目覚むる心地はすれ)	八
3	仙台・宮城野(名取川を渡って仙台に入る)	八
4	奥の細道(かの画図にまかせてたどり行けば)	八
5	多賀城址(壺の碑)	八
6	末の松山・塩竈の浦(それより野田の玉川・沖の石を尋ぬ)	九
7	塩竈の明神(早朝塩竈の明神に詣つ)	九
8	雄島・松島(抑も事古りにたれど)	九
9	瑞巖寺(十一日瑞巖寺に詣つ)	九
10	石の巻(十二日)	九
五 陸奥(陸中)の部		一〇
1	平泉—高館(三代の榮耀一睡の中にして)	一〇
六 陸奥(陸前)の部(2)		一一
2	光堂(豫て耳驚かしたる二堂開帳す)	一一
11	尿前の関(南部道遥かにみやりて)	一一
七 出羽の部		一二
1	最上の庄へ(あるじの云ふ)	一二
2	尾花沢(尾花沢にて清風と云ふ者を尋ぬ)	一二
3	立石寺(山形領に立石寺と云ふ山寺あり)	一二
4	大石田(最上川乗らんと)	一三
5	最上川(最上川はみちのくより出でて)	一三
6	羽黒山(六月三日羽黒山に登る)	一三
7	月山・湯殿山(八日月山にのぼる)	一三
	(谷の傍に鍛冶小屋と云ふ有り)	一三
8	鶴ヶ岡・酒田(羽黒を立ちて)	一四
9	象潟(江山水陸の風光数を尽くして)	一四
八 出羽・越後の部		一五
1	鼠ヶ関・佐渡(酒田の余波日を重ねて)	一五

2 親知らず・市振の関（今日は親知らず子知らず・犬もどり・駒返しなどいふ北国一の難所を越えて疲れ侍れば）……………一五四

九 越中・加賀の部……………一六〇

1 黒部四十八ヶ瀬・那古の浦（黒部四十八ヶ瀬とかや）……………一六〇

2 俱利伽羅が谷・金沢・小松（卯の花山・くりからが谷をこえて）……………一六三

3 太田神社（此の所太田の神社に詣づ）……………一六三

4 那谷（山中の温泉に行くほど）……………一六五

5 山中温泉（温泉に浴す）……………一六七

（曾良は腹を病みて）……………一六九

6 全昌寺（大聖寺の城外）……………一七一

十 越前の部

1 吉崎の入り江（越前の境）……………一七六

2 天竜寺（丸岡天竜寺の長老）……………一七六

3 永平寺（五十町山に入りて永平寺を礼す）……………一七七

4 福井（福井は三里斗りなれば）……………一七六

5 敦賀（漸く白根が嶽かくれて）……………一七九

6 氣比明神（その夜月殊に晴れたり）……………一八三

7 種の浜（十六日空霽れたれば）……………一八八

十一 美濃の部……………一九一

1 大垣（露通も此のみなとまで出でむかひて）……………一九一

跋……………一九五

去来書写本奥書……………一九五

附録 芭蕉略年譜……………一九八

歌仙「馬かりて」の巻……………二〇三

図版……………二〇三

口絵 小川芋銭画「奥の細道市振りの遊女」

挿画 「おくのほそ道素竜清書本」表紙芭蕉自筆題簽・同本文冒頭 二六／芭蕉庵・採茶庵

位置図 三／表八句と懐紙（本文三三頁）・日光山全景（本文四四頁）・殺生石（本文六三頁）

二〇四／「野をよこに」の句の小切れ（本文三三頁）・もじ摺り石（本文七六頁）・多賀城碑文（本文九三頁） 二〇五／松島（本文一〇〇頁）・雲居禅室の額（本文一〇二頁）・高館から衣川を望む（本文一二頁） 二〇六／平泉旧跡図 一二五／金色堂覆堂・金色堂内部 一二六／曾良自筆随行日記（五月十五日―十七日）（本文二八頁）・三山巡礼の句の短冊（本文三三頁） 二〇七／湯殿山 一三三／出羽三山地図 一三四／立石寺（山上の堂）（本文三三頁）・親不知の怒涛（本文二五四頁）・俱利伽羅古戰場（本文二六三頁） 二〇八／道元筆跡と花押・道

元禪師像・永平寺全景 一八〇／那谷寺(本文二六頁)・氣比神宮 朱の鳥居(本文二五頁)・種(種)の浜・本隆寺(本文二八頁) 二〇九

おくのほそ道足跡地図……………三〇〇

発句索引……………三三三

解 説

一 芭蕉の俳諧の発足

寛永二十一年(一六四四)伊賀上野で生まれた松尾芭蕉は、藤堂蟬吟(士大将家の嫡男良忠)の催した貞徳十三回忌追善百韻に宗房の号で一座しており、蟬吟と共に北村季吟門の俳諧で発したが、蟬吟の死によって「仕官懸命」の夢は破れ、京へ脱出し俳諧を「此の一筋」と執心するに至り、やがて寛文十二年(一六七三)正月、三十番句合『貝おほひ』を編んで産土の天満宮に奉納して俳諧師志願の文運を祈り、江戸へ下った。この句合は、十番左の「鳴(き)さはげにほんづゝみの無常鳥」に対する判詞に「ひつびけ。うんのめ(引つ弾けうん飲め)とうたふ小歌なれば。」と山谷踊の末の文句を引いている例にも見て取られるように、先駆をなす「奴俳諧」に導かれながら自序にいう「ふしぐ多き小歌」「はやり言葉のひとつくせあるもの」、わけても寛闊風の横溢した六方詞(奴詞)並びにこれを含む奴踊の小歌があり、談林を先取りするかに思われるまでの青春の諧謔になるものであった。宗房二十九歳の新しい人生への再出発の念願をこめた『貝おほひ』は、五十一歳第三次の芭蕉庵で推敲を了え素竜の清書もでき上がった「おくのほそ道」の結びに据えている

蛤のふたみにわかれ行(く)秋ぞ

という、西行の歌を踏まえた句に遥かに照応させられてあり、内容的にも、同じく飯坂温泉から桑折の駅への条の「路縦横に踏んで伊達の大木戸を越す」の「軽み」の表現に昇華されていると見定めることができる。(後掲のそれぞれの

てしまうのである。

二 俳諧の文章としての紀行へ

俳諧というのは、もともと「たわむれ」「滑稽」を意味したから、『万葉集』にもそういう意識で詠んだ歌がいくらかも見られるが、『古今和歌集』では「俳諧歌」の部立が見られる。

やがて五七五の形での歌いかけには七七で、七七の歌いかけには五七五で応える即興の短連歌から、長連歌が生まれ、連歌が流行して式目を整えて真面目なものになると、今度はその息抜きの俳諧の連歌が生まれ、それがまた当座のものではなく独立して行われるようになり、「俳諧の連歌」の名称も固定し、単に「俳諧」と呼ばれて、連歌に同じく発句と発句に付句を付け進めて完成する作品（主として百韻であったが、やがて芭蕉が三十六句から成る「歌仙」を主とするに至る。）とを作品の形態とする意味において「俳諧」とした。

談林の驍將の一人であった井原西鶴が「好色一代男」を刊行して浮世草子の始祖となったのが天和二年であって、これに対して芭蕉は、右の韻文の俳諧に相対して散文においても自覚的に「俳諧の文章」の達成を志すに至るのである。彼れは沢山の小品をものしているけれども、「俳諧の文章」即ち「俳文」としての自覚をもって彫琢し且つその完成稿を示したというべきものは、『幻住庵記』など必ずしも多くはないように考えられる。『幻住庵記』では『猿蓑』収載の決定稿に至るまで数次の改稿が知られているばかりでなく、元禄三年秋の向井去来宛書簡で、去来の批判に答えた上なお加筆を求めていて、

このかみの御ぬしへ御尋可^レ被^レ下候。誹文御存知なきと被^レ仰候へ共、実文にたがひ候半ハ無念之事二候間、御むつかしなから御加筆被^レ下候へと御申可^レ被^レ下候。

という依頼もある。このかみは去来の兄をさす。去来は後に芭蕉の言を、

先師曰(はく)、「世上の俳諧の文章を見るに、或(いは)漢文を仮名に和らげ、或(いは)和歌の文章に漢字を入^レ、辞あらく賤しく云(ひ)なし、或(いは)人情を云(ふ)とても、今日のさかしき限々を探り求め、西鶴が浅く下れる姿有(り)。吾(が)徒の文章は慥かに作意を立(て)、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云(ひ)つゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐(か)しく云(ひ)とるべし。」となり。

と『去来抄』故実に記している。俳文は、芭蕉にとつて、内容的にはみやび一辺倒でなくひなびをも厭わず、表現には雅言に拘束されることなく俳言即ち漢語・俗語をも駆使して詩語とする文章であった。

彼れはやがて俳諧即風雅としその根柢を風雅の誠に見出だすのであって、俳文から書簡等にわたつて早くからその論の文章との関わりに言及するものもないではなく、又各務支考の虚実論のようにこれに参考になり発展させた者もいるが、芭蕉自身のまとまった論は、向井去来の『去来抄』・服部土芳の『三冊子』その他の伝えるところや彼れの紀行『笈の小文』に拠らなければならぬ。長途の紀行の『野ざらし紀行』と『笈の小文』とは、その試みの発展や論としても重要な存在となっている。

最初の『野ざらし紀行』は、「三更月下無何(に)入(る)」の偈の句の想いを求めて「貞享甲子(元年、一六四)秋八月」出立、

野ざらし(鬪鬪)を心に風のしむ身かな

の発句を立てて書き始めてあり、後『ほそ道』に至つて「古人も多く旅に死せるあり。」と呼応し、

通(か)なる行(く)末をかかえて斯(か)る病覚束なしといへど、鬪旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路に死なぬ是(れ)天の命なり

と承ける出発点をなしている。紀行の前半も未だ句が並び地の文は句題の形を取つたものやその前書きを出ない部分